特集・婦人問題❺

婦人の地域活動

①育児期における主婦の社会参加
②乳幼児家庭教育センターの活動
③地域活動をとおしてみた婦人問題
④学童保育とともに

①育児期における主婦の社会参加

長井京子

一――すみれ会設立の背景
二――すみれ会発足から現在まで
三――現在のすみれ会
四――まとめ
五――最後に

一――すみれ会設立の背景

❶―団地の完成まで

公団の賃貸住宅である西菅田団地の入居が開始されたのは、昭和四十六年十月のことである。神奈川県とはいえ、山を切り開いて建てられた五階建住宅の回りは、主にキャベツ畑と造園業者の庭である。二DKから三DKという間取りに入居したほとんどの家族構成は、世間で言われる〝核家族〟であった。

横浜駅からバスで二五分という触れ込みにもかかわらず、朝夕のラッシュ時には一時間を越えることがよくあり、その上にバスの本数も少なく、まさに陸の孤島といった状態の団地であった。

団地内には、各街区(七街区まである)に子供の遊び場がある他に、二つの公園(一つは後に保育所となる)と幼児用プール、集会所、郵便局、そば屋、酒屋、薬屋、理髪店、美容院と小さなスーパーマーケット、それに銀行や保健所などに行くためには、バスを使用しなければならない。横浜線の鴨居駅にはバスで七～八分で出られるが、当時、その駅前には小さな商店が数軒しかなく、バスの本数も極端に少なかった。

これらの悪条件を住民の力で少しでも改善していこうという住民達の集まりから、その年に自治会が結成された。そして翌四十七年六月には残り全ての工事が完成し、西菅田団地は総戸数一、三一〇世帯となったのである。

❷―婦人部の活動

当時、自治会の婦人部長であった山本キミ子氏は、その仕事の一端として乳幼児を持つお母さん達のための育児相談を自治会の広報で呼びかけたのである(四十八年六月)、これがすみれ会誕生のきっかけとなった。

慣れない土地で知り合いも少いうえにコンクリートの壁に囲まれて乳幼児を育てていた人達の一部が、この呼びかけに応じて家庭という一番小さな社会から一歩を踏み出したのである。当時は、山本氏を囲んで育児相談をしていただけであるが、若い母親達が集まって悩みや夢を

話し合っているうちに、何かが生まれてきたのである。そして乳幼児を持つ母親の集まりである〝すみれ会〟となった（相談役に山本氏、初代会長は松波登女子氏）。

❸—社会的背景

戦後のベビーブームといわれた時代の子供達が父母となり、第二次ベビーブームといわれはじめた頃、ここ横浜の人口も通勤圏の拡大から増加する一方であった。行政の手は人口の伸びに追いつかず、隅々までは行き渡っていなかった。足りないものずくしの中でスタートをした西菅田団地は、まさにその典型ではなかっただろうか。

入居時には幼稚園も保育所も近くにはなく、近所の子供と遊ばせたくても、親も子も地域という社会に慣れていないために、家庭から外へ出るだけでもためらいがある。外へ出たとしても、他人のことには無関心という風潮が社会にあり、近所づきあいをする上で本音をいうことはタブーという状態では、地域で子供を育てるという昔ながらのやり方は、全く通用しなくなっていたのである。

一方で、育児出版物には種々の情報が満ちあふれ、それによって育児に自信をつけるどころか、その情報を多く取り入れれば取り入れる程、どれが正しいのか判断に迷い、より不安がつのるありさまであった。そんな中で切実に仲間が欲しいと思う人達が集まってきたのは自然の成りゆきであろう。

二——すみれ会発足から現在まで

❶—保母の必要性

最初の活動は、親が当番制で保育をすることであった。わが子を他人にあずけるまたは他人の子をあずかるという行為の中から生まれたものは、わが子を客観的に見つめることができたことである。育児書を読んで隣の子と比較し一喜一憂するのとは違い、集団の中の子供を冷静に見つめると、欠点と同時に長所もはっきりと見えてくるのである。自分の育児態度を他人の目にさらすと、時には他人から批判を受けることもあるだろうし、よその子と比べて自ら反省することもあろう。いずれにしても、それは前進する姿勢に他ならないのではないだろうか。

しかし、当番制で保育をはじめてみて、経験不足から子供を持てあますこともあり、その解決方法として、保育は主に専門家に任せてしまい、当番は補助として今まで通りにつくことになった（五十年四月）。

それは子供達が集団生活をする訓練にもなったし、母親達にとっても子供達のいつもと違う面を見つけることになったり、母親同志の横のつながりができるとか、ほんの少しの時間でも子供から解放されるという利点もあったのである。

——育児日誌より——

一月三十日（金）　当番　飯田

○折紙とお店屋さんごっこ

○おやつ

○鬼の面の色ぬり

○絵本と歌

〈感想〉

先生が本を読んで下さっている時の、子供達の態度や目の動きがとてもかわいく、目が光っていて見ていて楽しかった。鬼の面の色をぬるのに、赤で顔全体にぬる子、緑・青・黄とぬる子、目は目、鼻は鼻で部分的にぬっていく子と見ているとその子の性格がわかるようだ。家の中で自分の子供だけを見ていると、何事においてもこれで良いのだろうかと心配になり、良い子にしようとあせり、しかってばかりいることが多いが、大勢の中で一人一人それぞれの動作を見ていると、子供達の良い面、悪い面が良くわかり非常に勉強になりました。また、先生の努力もわかり大変良かったと思います（三歳児クラス）。

❷—運営上の諸問題

○先生にお願いしてから数回目に、子供達のふざけ合いから一人の女の子が怪我をしてしまうという事件がおきた。幸い傷は軽くて済んだのだが、保育中の責任の所在などについて話し合うきっかけになった。

○最初の頃は会費もなく、教材やおやつ代なども必要になるたびに支払っていた。会計は当番が兼任していたが、後で専任となり、保育費やすみれ会費も決められた。

○保育は週に一回であった。しかし、遠足のようなものや、軽い外遊びなどをするうちにこれならば、先生がいなくても親子で十分に楽しめるのではないかということになり、週一回は先生なしで青空保育をしてみることになる（現在でも三歳児はこの型式である）。

○母親が働きに出る人や、お産や病気などで当番ができなくなった場合、どこらへんを基準として参加を認めるかの話し合いも必要となった。

以上の四点の他にも細かい問題はいろいろあったが、そのたびに話し合って〝すみれ会覚書き〟が作成された（覚書き参照）。

❸—幼稚園不足の問題

四十九年～五十年、団地周辺にもすでに幼稚園ができてはいたが、定員をはる

かに上まわる希望者があるために、幼稚園浪人を心配する人々が夜中から並んで入園試験を受けるといった時期もあった。結局、受け入れ側の幼稚園でも詰め込み保育になってしまい、それに反発する人も出てきた。五十一年四月には、そうした人達が集まり、すみれ会でも四～五歳児保育もはじめたのである。幼稚園の入園料や月謝の高いこと、詰め込み保育では個性の育たないことなどの不満をカバーできるような手作り保育の芽がここに生まれたのである。それによって現在のようなグループ編成となった（表―1参照）。

❹―乳幼児家庭学級の開設

五十二年には、山本氏の指導のもとに、すみれ会による第一回目の乳幼児家庭学級が開設された。乳幼児家庭学級とは、子供達の健全な成長と人格形成を育むための、より良い家庭教育に関する学習会である。横浜市の補助を受け、世話人が企画をし、学級生全員で運営をする。

横浜市内では、市や県による各種催し物が数多く開催されていたが、そのどれをとっても（ごく一部の例外を除いては）託児をしてくれる所はなく、勇気を出して子供連れで行ったとしても、子育て終了後の先輩達からは白い目で見られ、時には嫌味のひとつも言われたりするのである。子育て中だからこそ聞きたい話を、保育室を設けて聞けるようにしよう、先輩達に育児の知恵を教えてもらおう、子供の嫌いなものを上手に食べさせる料理法は、本好きな子にするためには等々、夢は限りなくふくらんで、第一回目は充実した内容の講座になっていったのである。

しかし、全員が乳幼児を抱えた主婦であり、限られた時間を使ってやるには数々の障害があった。その一つは講座内容によって出席人数が極端に違うことがある。個々の興味の対象が異なるのは仕方のないことであるが、全く興味のないことには、準備する人の苦労などおかまいなしに無視するという人が、あまりにも多かったのである。二つめは、保育室を設けたにもかかわらず、親離れのできる子が少なかったことをあげなければならない。普段の保育では上手に親離れができていた子も、馴染みのない保育者と仲間達、親離れのできない子の不安が移ってしまうのである。せっかく設けた保育室も、一部の子供達のためにあるという状態で、他の子は最初から最後まで親のひざか、保育室と親の所を行ったり来たり、または講演中の部屋をかけまわるといったぐあいであった。

その他にも世話人を悩ませたことがあった。それは開始時間が守られなかったことである。子連れの主婦が、朝早くから家をあけるのだから大変なのだが、講師をお願いした先生がとっくに用意をして待っていて下さるというのに、会場には世話人以外には数人だけという日もあった。

これらの問題に振りまわされながらも、理想を求めて乳幼児家庭学級は続けられていったのである。そして世話人の胸に大きな安堵と小さな不満を残して、この乳幼児家庭学級は、二回目の終わりを告げたのであった。

三――現在のすみれ会

❶―五十六年度の活動内容

今年の会員数は三四人である。その内訳は〇～二歳児九人、三歳児一五人、四～五歳児一一人となっている（会員は母親名となっているため重複する）。年間行事としては表―2のとおりである。すみれ会は母親の会であるので、各種行事にも必ず母親が参加することになっている。運動会には母親達の考えたユニークな競技があり、子供達の競技と同じくらいに親の出番があるのである。七夕会やクリスマス会には、手作りの笹飾りやツリーが飾られ、必ず母親達による劇や手品等があり子供達を喜ばせている。

これらの季節行事の他にも、料理講習会や交通安全教室、手作りおもちゃの講習会なども開催される。クラス別の勉強会では、子供の年齢に応じた保育の研究、行事の準備などを主にやっているが、時には母親のための手芸講習会をやって楽しむこともある。

表―1　すみれ会のグループ

年齢	0～2歳児	3歳児	4～5歳児
グループ名	さくらんぼ	ひまわり	つくし
活動日	月1～2回 母子で	○週1回 子供は保母 母親は勉強 ○週1回 母子で	○週6回 子供は保母 ○週1回 母親は勉強 ○月2回 母子で

表―2　すみれ会年中行事

月	行事名	
4月	入会式	クラス別
5月	遠足	クラス別
6月	小運動会	合同
7月	七夕会	合同
9月	大運動会	合同
10月	遠足	クラス別
10月	おいも堀り	合同
11月	バザー	合同
12月	クリスマス会	合同
3月	閉会式	クラス別

会の活動では、月に一回、市の乳幼児家庭教育センターの研修会にも出ている。三〜四人が代表で出席し、帰ったら各クラスに報告をして、それを保育や親の集まりに生かしているのである。ここは保育室が完備されており（保育はボランティアと地区グループ当番制）、市内のいろいろなグループとの交流もできるので、いつでも意義のある学習ができる。

その他には、乳幼児家庭学級にかわるものとして「母親クラブ」の活動をしている。これは、家庭学級の終了後も何かの形で勉強を続けていこうと取り組みはじめたもので、区の助成をうけている。区の催し物に参加する他は、講演会などは計画せず、助言者のもとにディスカッションをしたり、親子でいろいろなものに取り組んでみるなどを、年間を通じて行っている。そのひとつに「畑」がある。自治会が近隣の農家より貸りうけている家庭菜園の一部を使って、子供達に野菜づくりをさせているのである。自分達の手で作ったものをお弁当の時間に、みんなで食べたりしているのである。

最後に、今年の活動の一番の特徴としては布絵本があげられる。それは会員のすべてが一年がかりでわが子に布の絵本を作ってやろうというのである。手引き書そのままのものから創作絵本、ストーリー性のあるものから数字を教える教育絵本までさまざまで、早い人はすでに二冊目に取りかかっている。何しろ子連れなので、制作中でもにぎやかで落ち着いてなどいられないが、子供のためと言いながら作っている親の方が結構楽しんでいたりするのである。

❷—すみれ会今後の課題

毎年悩まされる大きな問題のひとつに役員選びがある。乳幼児学級の項でもふれたように、受け身の会員が多くて、各グループのリーダーはもとより、すみれ会の会長、副会長、会計となると、責任の重い仕事だけに本人の覚悟と共にご主人の協力も必要なのである。それに、西菅田団地は賃貸住宅なので当然のことながら、かなり引っ越しが多い。経験をつんできて良いリーダーに育ちそうだという人が、年度の途中で突然引っ越すなどというのは珍しくないのである。

毎年の募集は年度末に行っているが、年々会員数が減少してきている。第二次ベビーブームのピークを越えたこともあろうが、団地内でも幼児の数が少なくなってきている。その上、すみれ会のように母親の会ということになると、楽をしたい人や子供に手をかけたくない人には、魅力がないのであろう。保育所ができ、幼稚園の三年保育ができた今、そちらの方に気持ちが流れていくのは仕方がないのではないだろうか。一〇年近い年月のあいだには〝現代母親気質〟といったものの移り変わりも大いに影響しているだろう。入会の動機も、発会当時は一緒に何かをやる仲間が欲しいとか、育児に関する正しい情報が欲しいといったものであった。しかし、現在ではその他に、早くから子供に集団生活をさせたい、子供から解放される時間がほしいといった声の方が強くなっている。それは即、会の運営のあり方にかかわってくるし、すみれ会の存在そのもの、時の流れと共に変わっていくのかもしれない。事実、団地の中にも近所づきあいが定着してきたし、その中で子育ての相談をしたり、かなり本音で話し合ったりもできるようになってきた。発足当時のようにわざわざ集まる必要がなくなってきた今、すみれ会のより良い存続をはかるためには、今の母親達の望んでいるものを見直してみる時期にさしかかっているのだろう。

❸—すみれ会を育てた婦人達

すみれ会も九年目をむかえ、多くの先輩達が巣立っていった。否応なしにいろいろな係をやらなければならなかったすみれ会から巣立っていくと、役員をやること自体が他の人より苦なくできるらしい。小学校のPTAの役員としても毎年数多く活躍しているし、すみれ会の相談役として後輩の指導にあたってくれている人や、保母として共に活動してくれている人もいる。OB会として活動を続けているグループもあるし、自治会の活動にも多くの人達がかかわってきた。すみれ会はより良い子供を育てるだけでなく、地域を担う婦人達も育ててきたことになるようだ。

四——まとめ

男は外へ出て、女は家を守るという古い観念論から今だに抜け出せない男も女も、電化の進んだ現在の家事においても、それを通用させることにすこし無理が出てきた現状を否定することはできないであろう。家事というものは完璧にやろうと思っても、一日が二四時間しかない以上、できない話である。それでは昔の主婦に比べて、少しは自由になってきた時間をいったい何に使うかが、多くの専業主婦の関心事であろう。子供が大きくなれば、パートタイムで働くことやおけいこごと、ボランティアも可能だろうが、乳幼児を抱えた主婦にできることは、ごく限られているのである。

世間では、子供を生きがいにすることを罪悪視したり、子離れ後に何をするかを子供が小さいうちから考えておくべきだとか、ニューファミリーの夫婦の関係

を大切にする生き方等がもてはやされている。それ自体はどれひとつ取っても間違っているとは思えないが、そのために子供が小さなうちから早く子離れをして、自分の生きる道を見つけなければと浮き足立っている人達もある。しかし、今大切なことは、子供達が子供の時に十分に子供らしく育つことではないだろうか。人生の中で子供であった時期は、ほんの何十分の一くらいのものだろう。その時代に親が親らしく手をかけてやっても、それはまた、親の人生のうち何十分の一の時間を与えただけのことなのだから。それでは子供が小さいうちはせめて家にいて、たっぷりと愛情を注いでやろうと思ってみても、実際に小さな空間に二人きりでいてみると、育児ノイローゼにかかる人の気持ちがわかるような気がしてくるから不思議である。

すみれ会は、そんな女達が集まって、子供のために、家庭のために、自分自身のために亀のような歩みを続けてきた小さな会である。待っていても社会が乳幼児を抱えた婦人を受け入れてくれないのなら、こちらから社会を少しづつ広げていこう、それが今、私達にできる精一杯の社会参加なのである。真の愛情を子供に注いでやるためにも、女同志が仲間意識を持って助け合うことが必要なのではないだろうか。ほんとうにやりたいことが、乳幼児を抱えた女でも、誰にも気がねなしにできるような世の中にするためにも、誰かが亀の歩みを続けていかなければならない。

五――最後に

今年、西菅田団地では一〇周年の記念行事が盛んに催されている。一〇年の年月は、団地を少しづつ住み良く変えていった。バスの本数も少しではあるが増え、私バスも開通し、鴨居駅周辺もほとんどの用は足せるくらいに開発が進んできた。

入居当時には乳幼児だった子供達は、小学生、中学生となり、自治会も子供会を結成したり、青少年対策に頭を悩ませている。時の流れと共に抱える問題も変わっていくだろうが、男と女がいて家庭がある限り、乳幼児を持つ婦人の問題がなくなることはないだろう。それを真剣に考える人がいる限り、すみれ会を支えてきた人達の軌跡は必ず役立つと信じている。

〈すみれ会会員〉

すみれ会覚書

第1項
“すみれ会”とは、0歳～5歳児を持つ母親のグループの名称である。

第2項
“すみれ会”は幼児をもつ母親の学習グループで、自主保育、話し合い、講演等を通じてよりよい家庭教育が行われるように計画し、実施される。

第3項
“すみれ会”は自主グループであるが西菅田団地自治会婦人部の後援を得て運営される。

第4項
“すみれ会”の運営は会員が自主的に役割を分担し協力し合うこと。

第5項
役員には会長、副会長、会計（各1人）、各グループリーダーを置き、月1回リーダー会議に出席し会議での決定事項を各自のグループに報告する。
又、グループの意見をまとめ、リーダー会議にかける。

第6項
自主保育は、母親の学習の一環として進めるもので幼児だけが自主保育のグループに入ることは出来ない。

第7項
自主保育というたてまえから、保育中に起きた事故等に関しては、その一切の責任を母親が負うものとする。

第8項
母親は何時でも連絡が出来尚且つ如何なる場合にも集まれる状態にいること。

第9項　“すみれ会”の会費は毎月200円とし会計担当者に納入することとする。

以　上